完全なる傍観は蒼く

雪芳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
完全なる傍観は蒼く

【Ｎコード】
Ｎ２７９４Ｊ

【作者名】
雪芳

【あらすじ】
ある地震が街を襲う。生き残った僕がみた、街のすがた。

僕は瓦礫だけの街のひび割れたコンクリの路上に横たわっている。
コンクリは冷たくて、僕の中を渦巻く体温の全てを奪ってしまいそうだった。でも、それはどうでも良かった。
僕はこのままぶち壊れてしまいたい気分で一杯だった。街と同じ状態になりたかった。

その地震は、大きすぎた。

冬の酷く早い朝で。それはいつも通りの朝になるはずだった。でも、昨日と同じ朝は来やしなかった。
気が付くと、僕の周りの全てが破壊されていた。必死に駈けずり回って、壊れて重なり合った家具の間を必死になって抜け出した。鉄筋とパイプが、誰かが骨折して骨でも飛び出したみたいに、むき出しになっていた。

無我夢中、ぺちゃんこになった家から這いずり出た。

世界は、日常を否定していた。半壊した家は、昨日までの僕という存在さえもなかったみたいで。
早朝の清くて冷たいはずの空気に、色々な匂いが混じっていた。街中が血を流してた。街中が泣き叫んでいて、街中が呆然としていた。焼け爛れたところもあった。

僕はいつから歩いているんだろう？

怖くて家にはいられなかった。家族を見たくなかった。大丈夫か、大丈夫じゃないのか、分からなかったけれど。

分からないから、僕は家から逃げ出していた。

戦争が起こったんだと、思った。

学校で読んだ、はだしのゲンってマンガ。広島で、原爆が落ちて、其れからの話。

友達は気味悪がって誰も読まなかったけれど、僕は全十巻を貪るように読んだんだよ。

僕はその世界に飛び込んでしまったのだろうか？

瓦礫の下で、誰かが呻いているよ。

なんで、こんなに血が一杯あるんだろう。僕の着ている服も、なんで血だらけなんだろう。

血って言うのは身体の中にあるもので、外に出ちゃいけないんだよ。

僕は歩く、果ての無い道のりを。僕は歩く、自分の記憶を辿ってる亡霊みたいだ。

道路を歩いている途中、逃げ惑う人々に混じって、僕と同じように彷徨うおじいちゃんと通りすがって。

みんな同じなんだねと、あまりに滑稽で、悲しくなった。

立ち止まっても、また歩くよ。

歩いて、歩いて、時折走って、でも歩いて、転んで、走って。

ああでも、…僕は何処へ行くつもりだったんだろう？

お腹がすいて、僕は辺りを見渡す。

グシャグシャになったローソンを見つけて、残骸の中を潜り込ん

で、僕はお菓子の山を見つけた。お腹が空っぽだったから、貪った。死ぬほど食べてやろうと思った。

ヘンゼルとグレーテルの憧れの物語の、片隅みたいなのに、どうしてこんなに惨めなんだろうか分からなかった。

涙も出ない。枯れた？冗談じゃない。そんな涙は元々、持ってない。

僕はコンクリに仰向けになる。

もう、なにもかもボロボロだった。全てが崩れたあの瞬間から、何度も地震が起こって、僕は何もかも怯えすぎて何もかもどうでもよくなってしまった。ただ、身体だけが馬鹿みたいに億劫だ。

僕はコンクリに横になる。

このまま地中の奥に沈んでしまえばいいのに。そして、何処まで沈んでいけるか試して。僕はマグマの底で何もかも笑ってやる。

僕は狂ってしまったんだろうか？僕はイカレテしまったんだろうか？

取りあえず、僕は困っている。

その時だ。

お父さんの声が、遠くから聞こえて、僕は飛び上がった。お父さんが叫んでいるのは、確実に僕の名前だった。

僕は頭が真っ白になって、全ての重力と色彩を失った。

お父さんに駆け寄る。お父さんが、僕を思いっきり抱きしめる。

お父さんの嗚咽を、僕は宇宙の彼方から聞いた。号泣っていうんだ、こういうの。
酷く懐かしい気がした。

お父さんが僕の手を引いて。お父さんが言う、うちに帰ろう。
僕は泣きじゃくっていた。お父さんと手を繋ぎながら。
涙に埋もれて熟した目玉で、僕はふと空を見上げた。

日常、だった。

空だけが、馬鹿みたいに、日常だった。
僕の世界の全ての平穏を吸い込んで、微動だにしない、それは。

……それは、恐ろしく青かった。

煙が何本か立ち上がっていた。なのに、それ以外は残酷までに日常だった。
人間の声、皮肉っぽいノイズが耳の奥から聞こえて。それは、お天気お姉さんの声だった。
お姉さんが笑いながら言うんだ。

「お散歩に行きたくなるくらい、明日はとても綺麗な青空になりますよ。」

阪神淡路大震災、１９９５年1月１７日。

あの日のことを、僕は何故か思い出していた。
もう、七年になる。

小学校を卒業して、中学校を卒業して、もうすぐ高校を卒業する。
世界は今日も、平然と流転を繰り返す。

泣きたくなる。
あの日は確かに記憶として身体に染み付いているのに、過去じゃなかったかのようで。

叫びたくなる。
今日も空は日常を描いていて。
今日も空は狂うほどに蒼い。

一筋の飛行機雲が青い空をたったひとつで切り裂いている。
明日は雨だろうか？飛行機雲がハッキリと現れるのは、空中に浮かぶ水の粒がとても大きくなっているからだと、何処かの誰かが言っていた。

明日も晴れだろうか？飛行機雲の予想は、あまり当たらないから。

今日も空は素敵に色づいて。
恐ろしいくらいの青を、その身に湛えて。
しらんぷりで染まる、日常を描いて。

（後書き）

中学生くらいの時に書いた作品。阪神淡路大震災から、もう何年も経つんですよね。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2794j/

完全なる傍観は蒼く

2011年1月15日20時40分発行